指1本で狙うゴール

電動車椅子サッカー

「前、前。前へ出せ」「シュートしろ」。大きな掛け声が体育館に響く。赤や青のおそろいのユニホームに身を包んだ選手たちが電動車椅子で縦横無尽に駆け回り、直径50センチのサッカーボールを追いに転がす。

先月下旬、横浜市内の小学校で、東広島の「FINE」と横浜市の「Yokohama Crackers」が一カ月後に迫った全国大会に備え練習試合を行った。

バスケットボールと同じ縦横18メートルのコートを使い4人一チームでプレーする電動車椅子サッカー。前に取り付けた、半分に切った軟式野球用のタイヤでボールを乗り、幅6メートルのゴールを目指す。

「重度身体障害者が楽しめるほぼ唯一のスポーツ。私たちに希望を与えてくれる」。FINEの高橋弘さん(35)は横に座ったまま笑顔を見せた。選手たちは器用にまひや筋ジストロフィー、交通事故などで首から下が不自由だ。唯一動かせる小指一本だけで操作レバーを前後左右に動かし、前後半各30分を戦い抜く選手もいる。

「試合前の独特の緊張感が生きがい。もっともっとうまくなりたい」。FINEの選手で大学4年、田中卓真さん(22)は目を輝かせる。筋ジストロフィーで10歳から車椅子生活の田中さんは3年前にこの競技と出合った。埼玉県長山市の自宅から電車を乗り継ぎ、週1回の練習に通っている。

Crackersの浮野結樹さん(30)は「僕には出来ないことばかりで、何事もあきらめがちだった。今は自分にも何かが出来ると思える。この人がプレーしてほしい」と語る。

それは選手たち共通の願いだ。

写真・文 丸山博

喜び、悔しさ、緊張感――。競技中は生活の中で表情が最も豊かになる瞬間だ

ボールの直径は50センチ。競技にヘディングはない

1本の操作レバーで車椅子を自由自在に操る。戦いの全エネルギーは指先に集まる

競技用電動車椅子は外国産が多く1台約100万円。選手の体形などに合わせた改造を手がける「エルビダ」の中村代表(左)

最高時速は6キロ。ドリブルやパスを駆使してゴールを目指す

初の世界大会、東京で開催へ

電動車椅子サッカーは1970年代に米国で誕生し、日本では82年に大阪で初めて行われた。現在、10カ国に広まり、競技人口は3000～4000人といわれる。

国内では約50チームの500人がプレーするが知名度は低い。普及活動をしている日本電動車椅子サッカー協会(事務局・愛知県西尾市 問い合わせファクス 020・4635・0201)には36チーム、約350人が登録。同協会は今月21、22日、第12回の全国大会を富山市総合体育館で開く。地区予選を勝ち上がった10チームが熱戦を繰り広げる。

ルールが各国で異なっているため、今年7月に10カ国の選手らが集まり統一ルールを策定した。日本ではチームの4人全員がフィールドプレーヤーだが、国際ルールでは4人のうち1人がゴールキーパー。ボールも日本では直径50センチだが、国際ルールでは33センチになる。来年10月に初の世界大会を東京で開き、各国代表が世界一を目指す。

編集・レイアウト 鈴木 崇行